

第 247 回 昭和の森自然観察会

ひかるどろだんごをつくろう！

堀 泰洋（千葉市）

日時：2012年7月8日（日）13～15時 天候：曇り

参加者：23名（大人11名、子ども12名） 指導員13名

担当指導員：高井昭夫 川北紀子 堀泰洋（須田聰恵）

この日は朝方まで雨が降っており、観察会の開催が危ぶまれるような状況でした。当初屋外にて実施する予定でしたが、雨を想定して急遽大きな東屋に場所を変更しました。雨は上がり、今回「市政だより」に掲載されなかったにも関わらず、HPやポスターを見ての参加者を迎えることができました。今回は地層についてのお勉強というより、土とふれあうことにより、土は様々な大きさの粒子から成っているのだと感じてもらうことを主眼としました。参加者は親子連れの方が多く、中にはきちんとスコップを持参して、やる気まんまんのお子さんもいました。

どろだんご作りは、「土と水とのコミュニケーション」。参加者自らが採取してきた関東ローム層の土を使って、まず土台作りから開始です。関東ローム層は、砂・シルト・粘土と異なる大きさの粒子がほぼ等量含まれるために固まり易いのだそうですが、それらを必要最低限の水を媒介させ、丁寧に押し固めていきます。子どもでもできるかどうか少し不安だったのですが、予想に反して、小学生のお子さんたちはとても上手にどろだんごを握り固めていました。小さなお子さんも親御さんがサポートして、みんなとても集中して取り組んでいました。

次に、乾いた土をかけて表面を滑らかにし、球形にしあげていきます。そして、さら粉（粘土）を手のひらにこすりつけ、それをどろだんごに擦り付けて皮膜を作ります。最後にフェルトなどでやさしく磨いて粘土粒子の向きを整えてやると、光を反射して「ひかるどろだんご」の完成です。磨くにしたがってどろだんごが光り出すと、「できた！」という声とともに満足気な表情を浮かべていました。

ところで、午前中に指導員が作ったどろだんごよりも、観察会で参加者が作ったどろだんごの方が上手にできていました。その理由は、つるつるした子どもの手の方が…なんて冗談もありましたが、午後の方が午前よりもあきらかに空気中の湿度が下がっていたことだと思います。そのため、さら粉を良い状態でまぶすことができたのでしょう。今回のどろだんごは一日でできる簡易版でしたが、他にもいろいろな方法があるようです。

参加者の感想

- ピカピカに光ってうれしかった。
- 親の方が子どもよりも夢中になってしまった。
- ガールスカウトや保育園の活動でもやってみたい。

